

国宝と茶室の庭園

森記念財団研究員
脇本敬治

六義園と並んで東京を代表する庭園が青山にある。青山通りと六本木通りから少し離れた位置にある根津美術館の庭園である。根津美術館は森記念財団による外国人観光客調査の美術館の訪問者数ランキングでは15位だったが、素晴らしいコレクションと日本を代表する文化、茶道を知るうえでもっと注目されてよいスポットだ。元々は明治から昭和にかけて東武鉄道をはじめ多くの企業の経営にかかわり、政治家、教育者としても活躍した根津嘉一郎(1860~1940)の自宅だった。山梨出身の根津は明治39年(1906)に青山の旧河内丹南藩高木家下屋敷を購入し、自宅を建設し庭も新たに作り変えた。麻布長谷寺に隣接する土地は、購入当時は茶畑で草が生い茂り狸が出るようなところだったと自伝に書かれている。

根津は「青山」と号し、茶の湯をたしなむ数寄者でもあった。明治に入り、それまで茶道を支えていた武家階級が瓦解し、人々の興味も欧米に向くようになり、茶道全体が大きな危機を迎えていた。その中で三井物産の社長だった益田孝「鈍翁」を中心とし、根津嘉一郎や実業家たちが、新しく茶道の中心となっていった。

鈍翁や根津は茶会を開く一方で貴重な茶道具や、美術品などを広く収集した。明治から大正にかけて、廃仏毀釈や大名家の没落によって、多くの優れた美術品が市場に出ており、欧米に安く売られることも多かった。鈍翁らは、国外にこれらの美術品が流失してしまうことを憂い収集を行っていたのである。そして、仏教美術をはじめとする美術品を積極的に茶の湯に取り入れ、今までの枠にとらわれない豊かで豪華な新しい茶道を生み出していった。

弘法大師の有名な書を手に入れた鈍翁は、その披露のため大師の命日に茶人を招いた茶会を自宅で開催した。貴重な美術品を拝見できるように展示し、多くの人を招待した茶会は評判となり、今日まで続く大師会として、日本を代表する茶会となっている。大師会はその後、根津嘉一郎や原三溪らが持ち回りで開催し、現在は根津美術館で毎年春に開催されている。

根津は青山の自邸の建設に当たり、茶人として理想とする庭園と茶室を作り上げた。茶道には市中の山居という言葉がある。都会の中であってもお茶を楽しむために、自然豊かな山に居る

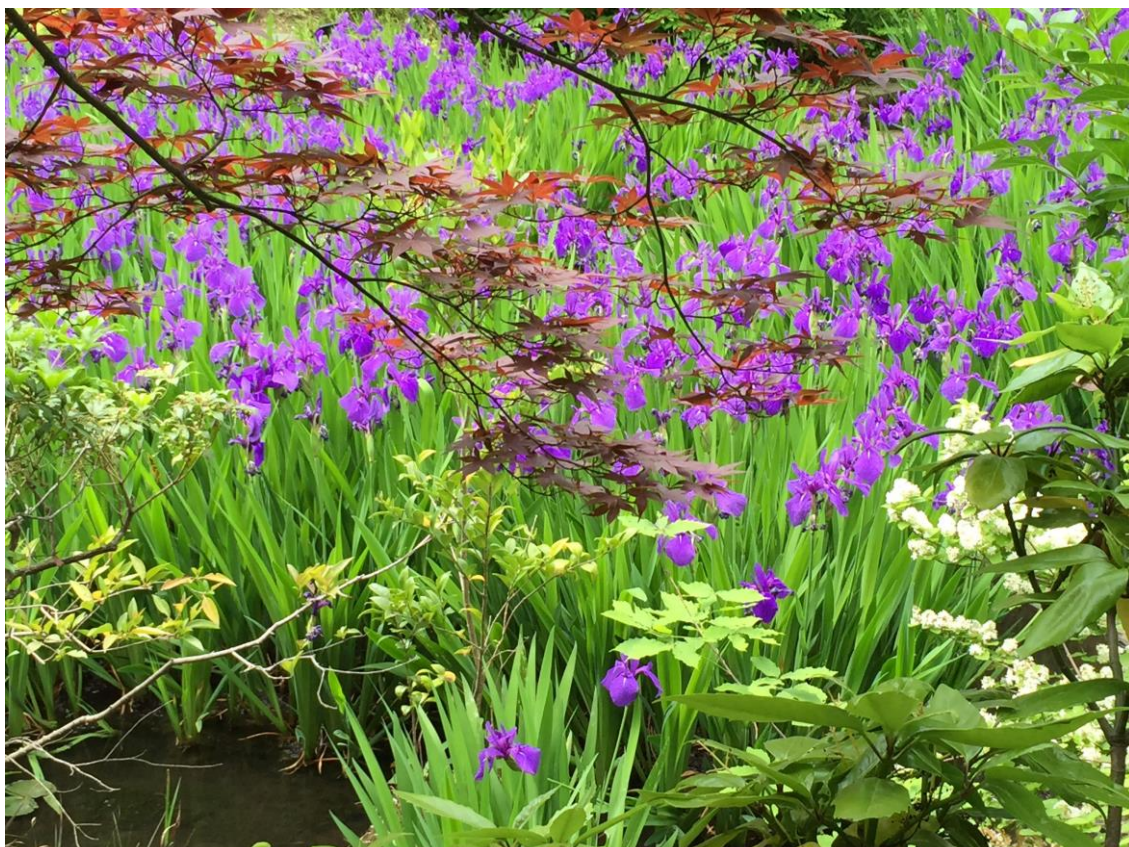


根津美術館の位置 (初代根津嘉一郎の遺志により昭和15(1940)年に創立、翌年開館した)

ような空間をしつらえるというもので、茶人たちが数百年にわたって工夫してきたのである。根津邸では敷地の高低差を巧みに利用し、数年の時間をかけ5か所の茶室を設けた庭園を作り上げた。残念ながら庭園は戦災の被害を受け茶室も4か所となっているが、訪れる

と回遊式の大名庭園とは異なる空間が広がっていることに驚くだろう。まずは都会の中の緑豊かな空間に癒される。また、飛び石や灯籠を配した趣のある露地の向こうにある小ぶりの茶室は閉じられていても美しさを感じさせる。この庭園は茶人だけでなく、忙しい日常に追われる世界中の現代人にとって世俗を忘れさせてくれる貴重な空間だと私は思う。

根津美術館はいつ訪れても裏切られることはないが、4月から5月頃をお勧めしたい。庭園のカキツバタが花開くこの時期に合わせて、尾形光琳の傑作、国宝『^{かきつばたず}燕子花図』が公開されるからである。『燕子花図』の金色をバックにした鮮やかな配色とデザインの素晴らしさと、庭に咲くカキツバタを同時に鑑賞できることは、本当に幸せなことだと思う。ニューヨークのメトロポリタン美術館にも光琳がカキツバタを描いた『^{やつほしず}八橋図』があるが、素晴らしい作品と自然の美しさを庭園の中で楽しむことができるのは根津美術館だけの贅沢だ。



庭園の池に咲くカキツバタ



尾形光琳^{かきつばたず}『燕子花図』



市中の山居の趣がある茶室



舟の茶室なのだろうか。湧水を利用した池に浮かぶ姿が美しい。



美術館入口脇に置かれた大きな手水鉢ちようずばちを使ったつくばい。手前の前石に客が乗り、つくばって手水を使う。左右の小型の石はそれぞれ明かりを置く手燭石てしよくいし、湯桶を置く湯桶石ゆおけいし。入口につくばいを設けるのは、お茶室の作法である。



枝折戸を茶室に続く露地に設け、結界とする。茶室空間を外部と区別するために用いられてきた庭園技法である。